

氏 名 (本 籍)	すぎ やま きん や 杉 山 欣 也 (静 岡 県)
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 2747 号
学位授与年月日	平成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	文芸・言語研究科
学 位 論 文 題 目	初期三島由紀夫における〈学習院〉
主 査	筑波大学教授 池 内 輝 雄
副 査	筑波大学教授 D. L. 川那部 保 明
副 査	筑波大学教授 名 波 弘 彰
副 査	筑波大学助教授 新 保 邦 寛
副 査	筑波大学助教授 清 登 典 子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、昭和期日本文学の代表作家である三島由紀夫の初期小説群と彼が在学した学習院の教育・文学環境との関連について、著者の発見にかかわる多くの資料を駆使して考察、研究したものである。

本論の構成は次のとおりである。

序章 初期三島由紀夫における〈学習院〉一枠組みの確立を目指して

第一部 環境としての〈学習院〉

第二部 『学習院輔仁会雑誌』と文芸部

第三部 「花ざかりの森」における展開

終章 三島由紀夫における〈場〉の復元

付録

付録一 板倉勝宏「学習院の思い出」翻刻・解説

付録二 坊城俊民著作目録稿

参考文献

初出一覧

序章では、三島由紀夫が昭和 6 年（1931）4 月に学習院初等科に入学し、昭和 19 年（1944）9 月に高等科を卒業するまでの学習院在学中の実態を正確に把握することの意味、意義を説く。すなわち、従来、三島研究においてこの期の実態を解明することが行われずに来たこと、同時に後年の三島自身や近親者の回想によって歪められ、虚構化された過去の〈伝説〉が流布し、それに基づいて研究がなされてきたことの誤りを指摘し、そうした遡及的な意味づけを排除し、事実と実態に即した作家・作品の生成過程の解明が学的研究において重要であることを主張する。

そのため、次の 3 つの視点を設定する。

1. 環境としての学習院の状況と三島作品との関係
2. 『学習院輔仁雑誌』における学習院文芸部の状況三島作品との関係
3. 「花ざかりの森」以降の展開と学習院との関係

第一部では、上記1の視点から三島在学当時の学習院の文化的・社会的な〈場〉の復元を試みる。すなわち、当時の学習院の教育の場としての実態を時間割、学生名簿、教官の異動状況、当時の教官・学生による各種発言や座談会記事、さらには学習院を回想した板倉勝宏執筆の「学習院の思い出」（未発表資料）などを綿密に分析し、次のような問題点を指摘し、説明する。

- (1) 従来、初等科時代について、三島が自身の出自に劣等感を抱いていたというジョン・ネイスン説（『三島由紀夫—ある評伝』1974）は誤りである。
- (2) 中等科・高等科時代について、学年が上がるに従って三島が学級内で頭角を現し、「組長」をつとめたり、学級主管（担任）で国語担当の岩田九郎に影響を受けたりした事実がありながら、三島はそれを隠蔽した。
- (3) 学習院輔仁会の弁論大会での活躍ぶりや、それを回想し自己分析を加えた「扮装狂」（生前未発表）その他の作品が戦時下の学習院の状況を見事に写し取っており、そこに三島の時代状況への迎合、あるいは批判の意識などが表出されている。同時にそれらは題材の上で多くの共通点をもつ後年の作品「仮面の告白」へと継承されず、ここでも三島が過去の事実を隠蔽したと言える。
- (4) その他「花ざかりの森」につながる「こころのかゞやき」「公園前」「雨季」（いずれも生前未発表作品）や「彩絵硝子」に、三島の貴族階級への批判的な意識が表出されている。

第二部では、第一部を受けてとくに学習院輔仁会文芸部に焦点をしぼり、三島にとって文芸部がいかなるものであり、彼の作品生成にいかなる作用を及ぼしたかを、中等科時代から最も親しかった年長の友人・坊城俊民とのかかわりを通じて次のように指摘し、実証する。

- (1) 『学習院輔仁会雑誌』『雪線』などの文芸部雑誌には、坊城俊民をはじめ多くの先輩の作品が掲載されており、それを少年時代の三島が読んだ形跡がある。三島が学習院において文学活動を開始する前に、範とすべき文学環境が整えられていた。
- (2) 坊城と三島の間に濃密な人間関係が成立した。とくに三島の「花ざかりの森」は先行する坊城の作品「鼻と一族」の影響を深く受けていた。とはいえ、両者の創作意識に根本的なところで違いがあり、坊城が事実の再現を志したのに対して三島は事実の徹底的な虚構化を目指した。三島の生涯にわたる文学方法はこうして開花した。
- (3) 三島が「はじめて小説らしいものを書いた」という「酸模」は、後年の三島の作品の原型的な意味を持つと同時に、学習院の上級生たちの作品を巧みに摂取したものであった。後年の三島がこの作品にほとんど言及しないのは、そこに原因がある。

第三部では、三島由紀夫の文壇デビュー作であり、初期の代表作とされる「花ざかりの森」（昭16・9～12）を中心に、それが従来、掲載雑誌『文芸文化』および日本浪漫派とのかかわりの中でしか論じられてこなかった点を批判し、学習院という〈場〉で生成されたことを重視すべきだとして次のように論じる。

- (1) 「花ざかりの森」の主要なモチーフである「貴族的なるもの」への復古とそれの「あり方」（三島書簡、昭16・7・14）をめぐる問題は、太平洋戦争開戦前夜の学習院における学生間の議論と密接な関連がある。弁論部を中心に「沈滞する学習院の再建策」としての「貴族の精神」の復古のキャンペーンがなされ、文芸部所属の三島も「花ざかりの森」をもってそれに応じようとしたのが実証できる。
- (2) 三島は学習院において東文彦、徳川義恭と同人雑誌『赤絵』を創刊した（昭17・7）。この同人雑誌は従来

ほとんど論じられることがなかった。三島はここに難解な作品「苧菟と瑪耶」を発表したが、その改稿過程に東の批評が介在しており、作品が同人との一種の共同作業によって生成されたことが明らかである。

(3) 同様に、三島は東の批評のもとに、旧作「花ざかりの森」の一部(「序」および「その一」の部分)を改作し、再掲した。こうした同人間の密接なかかわりに留意しないと、作品の真の姿を見誤るおそれがある。そこに戦中を生きようとする三島の姿も浮かび上がる。

(4) 同様に、東の小説「少年」(創刊号)も、三島の批評によって改稿されたことが判明する。

(5) こうした作業から、三島作品の生成の必須条件として学習院の教育環境が大きく作用していることが確認される。しかし敗戦を境に、三島が考える「貴族の精神」の〈場〉としての学習院は変容する。そのことが三島をして自らの学習院体験を封印し、隠蔽させることになったと推量される。

終章では、研究史的な立場から従来の研究が〈三島伝説〉を無批判で受け入れていることについて具体的に明らかにし、総論的なまとめを行うとともに、作品をその書かれた文化的・社会的な〈場〉に戻しながら、言いかえれば、書かれた〈場〉を資料によって復元しながら読むことを提唱し、さらにその応用として三島の最後の作品『豊穡の海』解明の道筋を説いている。

さらに付録では、著者の発見による板倉勝宏の「学習院の想い出」の翻刻・解説と、これまで編まれたことがなかった坊城俊民の詳細な著作年譜を掲げている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

三島由紀夫が日中戦争・太平洋戦争下に発表した初期の代表作「花ざかりの森」は、これまで、その発表誌『文芸文化』、および同誌と深い関係にあった日本浪漫派とのかかわりの中でしか論じられないという偏りがあった。著者はこうした傾向を批判し、作品が書かれた現場をつぶさに検証することを提唱し、「花ざかりの森」が、三島の育った学習院という教育機関の中での特殊な文学環境(=〈場〉)の中で生成されたことを立証した。さらに、著者はこの一作に限らず、三島が学習院在学中に執筆した多くの作品群の個々について、それらがいかに学習院の〈場〉と深くかかわって生成されたかを、当時の学習院の教育理念、カリキュラム、教官や学友の存在、校友会雑誌『学習院輔仁会雑誌』や学内同人雑誌『雪線』・『赤絵』など、多数の資料を掘り起こし、それらを駆使して考察した。その考察は事実に即した具体性、実証性を持ち、説得力に富む。

従来の三島研究は、批評家の主導で行われ、また、三島自身も過去について修正を施した発言をしてきたこともあり、三島の学習院時代の実態は正確に解明されることなく、いわば虚構化、伝説化がなされてきた。著者の上記のような研究の方向・方法による立論は、こうした三島研究の迷妄をうち破る、はじめての本格的な研究として高く評価できる。今後、著者の研究を端緒に三島研究が新しい地平を迎えることは確実に予測される。それほど画期的な研究と言っても過言ではない。

ことに、著者が三島および三島の在学した当時の学習院関係の資料を博搜し、多数の新資料を発見したことは特筆に値する。すでにその一部は雑誌『文学』(岩波書店)に、また三島の初期に関する論考の一部もすでに全国規模の学会誌に掲載されている。

しかし、問題・課題がないわけではない。三島の初期作品を学習院の教育の〈場〉にのみ固定してとらえることが絶対的な価値をもつとはいいがたい。書き手であり読み手であった三島が、後日、事故の文学的な評価軸を変更することによって、過去の作品を読み変えることは十分ありえる。批評家・読者も同様であろう。そうした読み手との多様な連動作用によって、作品はさらに別の意味を帯び、変成する。著者の今後の課題は、こうした高度・広範な視点から、より大きな意味での作品生成のダイナミズムを総合的にとらえることである。

以上のような問題点はあるとしても、本論文で著者が示した力量は今後の更なる発展を十分期待させるもので

あり、本論文がこの分野の研究に貢献するものであることは揺るがない。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。